



第 18 号

玉寶山長光寺

〒169-0073
東京都新宿区百人町1-5-2
TEL:03-3209-5360
FAX:03-3200-7026
<http://www.chokoji.net/>



一筋がよし寒椿

住職 松 倉 太 鋭

『伊豆の踊子』の初代監督である五所平之助という人の句に「生きること一筋がよし寒椿」というものがあります。木枯らしの吹く寒風のなかに、可憐に花を開く寒椿は、厳しい気候に負けじと紅い花を付けています。ちょうどその姿は器用に生きることなく、一筋に一つの目標に向かって生きる生き方そのものです。どんな職業も道を全うするには、ひと一倍の努力を必要としています。厳しい職務。一筋に情熱を傾ける姿に、監督は美しいものを見たのではないのでしょうか。

花は寒さのなかでも精一杯生きています。精一杯という思いも持たず、不平を言ったり、ふて腐れることもありません。

現代人はいまだ多様な社会に生きています。また、多くの情報があるとその中で何を選んで良いのか、余りにも選択肢が多いためか、却って迷うことが多く見受けられます。

よく人生は「運」「根」「鈍」だよ。と言われています。優秀でなんでも器用にこなす人を、現代では褒めそやす風潮がありますが、志を立て、志をまもり、志を貫きとおす人に「運」をつかまえる力が自然と身についてくるのではないのでしょうか。チャンスを自分のものにするのが「運」なのかも知れません。

道元禪師も「雪裡の梅花只一枝」と述べておられます。

長光寺の歴史

長光寺の開基（寺を建立した寄進者）は甲州の武田氏の遺臣（法名は直心軒祖道円成居士）であることは前回述べました。しかし、法名は分かりましたが、肝心かなめの氏名がわかりません。

そんな最中、本堂建築のために旧本堂の裏手にある石仏を調査したところ、偶然にも石仏群の一隅に、開基家の供養墓を発見いたしました。長いこと石仏のなかに埋もれておりましたので、よくぞ四百年もの間残っていてくれたという思いがいたしました。この観音様を刻んだ石像が、ひっそりと長光寺のかたすみで歴史を眺めていたかと思うと感無量です。それにつけ『文政寺社書上』という古文書の発見は有り難いご縁でありました。



長光寺 開基家の供養塔

この文書の中に記述された開基さんの没年が「慶長二酉年三月朔日卒」（二五九七年）となっております。寺に現存する供養石像には「保十九寅年正月四日」（一七三四年）と刻まれています。

「保」は推察するに「享保」であることは間違いありません。本体の建立年号は石が欠損して判読ができません。しかし、「保」と「十九年」が判ればおおよその推察が可能です。享保十九年にこの供養塔が造立されたことは、確実です。ただ、亡くなってから百三十七年後に供養塔を建立したのは、どうしたことでしょうか。また、当然在るべき開基さんのお墓が長光寺に無いのは腑に落ちないところです。

推察するに、開基さんは滅亡した武田家の菩提を弔うために長光寺を建立しましたが、自身はその後江戸にとどまらず、郷里（自身の領地）へ帰ったのではないのでしょうか。それ

女の百回忌を甲州の恵林寺でおこなったところ、各地の大名たちに仕えている子孫が五百九十二人集まったという記録が残っています。勇猛果敢な騎馬戦を得意とした武田家の遺臣は、江戸時代になっても、公然と参集することが出来たことは、注目すべきことです。

開基さんの墓が長光寺に無いので、享保十九年正月四日に時の任職である四世実州祐山和尚が供養塔を墓地に建立し、開基さんの功績を讃えたのではないかと思います。いづれにしても寺を建立するという事業を成すだけの、経済力を持った身分であることは確かでありましょう。

本堂工事をしながらも、開基さんの墓所と氏名を調べるために、山梨県立の博物館へ伺ったり、武田家の菩提寺である山梨市の永昌寺（信玄公以前の墓所）と甲府市の大泉寺（信玄公以後の菩提所）に行ってみましたが、そちらにも資料が無いという返事。さらに手掛かりを求めて、甲府の武田家の屋敷跡であったという神社まで行ってみましたが、手掛かりすらありません。やむなく途中で調査を打ち切りましたが、これからは開基家の墓所を探すことは、今後の課題として調査を続けていきたいと存じます。

開基さんが没した慶長二年という年は、秀吉の第二次の朝鮮出兵がなされた時（慶長の役）で、翌年の慶長三年には豊臣秀吉が失意の裡に没しています。朝鮮での戦況が膠着する中で、天下の流れが徳川氏に移行する過渡期でありました。

参禅会より

長光寺で行っている坐禅会も毎回大勢の方が参加しています。毎回参加する方は坐禅が終わると道元禅師の著作である「正法眼蔵」という、禅の奥義を述べた書物を参加者で参究しています。

昨年までは「従谷録」という百則（百の公案）の講義を続けておりました。これは公案という方法をとっていることで、自分の人生に照らし合わせる事が出来ますので、いろいろな故事が毎回登場するので興味もあつてか、比較的大勢の参加者がありました。これが終わりましたので現在は「正法眼蔵」に入っております。

本来ならば禅は不立文字を建前としておりますので、講義はどのような理論となりやすいので、やってよいやら、悪いやら、戸惑うところなんです。しかしながら参加者の方々は知識や経験も豊富の方も多いので、坐禅だけでは、参加者も減ってくることも事実です。実践も大切ですが、それだけでは取りつくしまありませんので、あくまでも参禅の指針となればと思います。

毎月第一土曜と第三土曜の二時よりは毎回参加の方々、三時半より初心者の方々の指導を行っています。（第二土曜と第四土曜は団体のみ）

秩父観音霊場を

満願しました

去る五月九日(水)に檀信徒の方、梅花講、写経会、参禅会の有志で秩父観音霊場の巡礼に出かけました。昨年二十五番まで回ったので、今回は二十六番から最後の三十四番の満願結縁札所までの行程でした。

二回目の巡礼には予想すら出来ない東日本大震災が起こり、延期する事態もありましたが、三回ともありがたい程の天候に恵まれ、念願の桜の季節にお参りができませんでした。

途中から参加して下さった方もおられますが、三回目
は山の上まで登るといふ難所もありましたので、参加を見合わす方もおられました。しかし、梅花講の皆さんは健脚では人後に落ちないという若さで、見事に全部の札所を回ることができました。

三十四番の札所を参拝するときには、全部をまわったという満足感と達成感が交差し、有り難いという気持ち
が沸々とわいてくるような気がいたしました。

いろいろと皆様にご協力いただき感謝を申し上げます。

梅花講の活動



平成24年10月2~3日 永平寺にて、東京都梅花大会



平成24年12月3日 鎌倉お寺巡りと忘年会

長崎にて



亀山社中の跡

十一月中旬、宗門の用事で長崎にある皓台寺という修行道場に行ってきました。思案橋に近い寺町には各宗派の寺が建っております。

長崎といえばキリスト教会や隠れキリシタンの遺跡が思い出されます。しかし、仏教もこれに負けじと寺院を建立し、布教につとめたことはあまり知られていません。

当初はキリシタン信者によつて焼き討ちにあつた寺もあつたと言われていますが、後のキリシタン禁制によつて形勢は逆転。正にこの世の有為転変を見る思いです。

せっかく長崎に来たのだからというわけではありませんが、皓台寺の近くの坂本竜馬の活動拠点であつた亀山社中へ行ってみました。皓台寺の門前から西に歩くこと一キロ

弱で入り口の看板が立っています。山頂近く

にあることは知っていましたが、実際に坂を上ってみると想像以上に、不便で難儀な住まいであつたことがわかりました。日本で最初の商社と、もてはやされていますが、当時は脱藩浪士での活動で、潜伏生活であつたことが偲ばれました。

また、この皓台寺の墓地には竜馬の片腕であつた近藤昶(長次郎)の墓がありました。土佐の餅菓子屋の長子として生まれ、幕末の激動の中を駆け抜けた志士ですが、残念なことに隊規違反を問われて切腹したとされています。その志の高い生涯には心打たれるものがあります。

『天のしずく』を観て

料理研究家の辰巳芳子さんの映画『天のしずく』を見る機会がありました。病床の父親に工夫を凝らした「いのちのスープ」を作つて看護したという、食というものが織りなす人生模様を描いた内容でした。ダシをとる「天つゆ」は「天の一滴のしずく」というもので、大地の慈しみというものに感謝していただき、食の原点を伝えてくれるもので、医食同源という語に相応しいものでした。

辰巳芳子さんというと、世の女性たちの手抜き料理を厳しい言葉で叱咤して、苦言を呈する人というイメージが最初に浮かんでまいります。

しかし、映画で初めて知ったことですが、辰巳さんの結婚は戦時中で、相手はすぐに出征。フィリピン沖で戦死してしまいました。そんなことを予見した父親は結婚に強く反対。親であれば当然のことでしょう。しかし、辰巳さんはその反対を押し切つて結婚したので、冬の寒さにも似た凛とした辰巳さんの生き方の裏には、こんな悲しい出来事があつたのです。

食材そのものや農業への感謝を忘れそうになる現在。とくに便利に馴れてしまった若い女性には、是非とも見てほしい作品です。



坐禅会で、ただ坐る

匿名 名

坐禅会に出ていることを親しい人に話したら「悟りたいんですか」と問われて答えに窮したことがあります。そんな大それたことではなく、ただ心の平安を保てたら、というぐらいのつもりだったので何か後ろめたいものを感じました。

マスコミが坐禅をもてはやし始めたころ、新聞紙上で、悟りを目指すこともなく、ただ流行に乗って坐禅することの愚かしさを批判する識者や、また逆に、目的をもった坐禅は邪道だと主張する方もいて、坐禅というのなかなか難しいものなのだと思います。

実は就職したての若い頃、会社の新人教育の一環で、ある禅寺に三泊四日の参禅をしたことがありません。手加減された修業だったはずですが骨身にしみる厳しさで、泣き言や不平ばかり言ってすこしました。最終日にお坊さんから「自宅でも一日何分でもいいから坐りなさい」と言われましたが、終わってしまえばお定まりのなりゆきで、そのうち念頭から消えてしまいました。そんな事が思い出されると、また後ろめたい気持になるのです。

老いの気配を自覚しだした頃、「紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし」という道元禪師の言葉がひときわ心にしみるようになりました。参禅の記憶が甦り、当時あれほど苦痛だった坐禅が何か懐かしいもののように思えはじめたのです。そんな経験をしますと流行に乗った体験坐禅も悪いことばかりではないような気もしてきます。

坐禅会に参加するようになりましたが、しばらくは昔と同様、ただ痛く辛いだけです。坐れば古い記



坐禅堂の文殊菩薩像

憶が次々に甦ってきて振りまわされ心の平穏どころではありません。そうこうするうちに四年経ってしまいました。

道場のある長光寺では、ご住職の『正法眼蔵』の講義が人気ですが、かなしいかな私には難解すぎて未だよく分りません。坐ることに少し慣れましたが深いことはよく分りません。難しい事は考えずただ分らないままに坐る、というのが私の流儀となりました。でも一つだけはつきりと感じることはありません。それは坐禅終了後に実感する心身に満遍なく行きわたった清浄感です。それは他では得られないもので、これが感じられるということだけで有難く感謝の気持でいっぱいになります。

形の大切さ

——坐禅できる有り難さと

坐禅する有り難さと——

慚 愧 三 郎

三年有余、玉寶山長光寺の道場に坐り、改めて、坐禅できる有り難さと坐禅する有り難さを想います。そして、坐禅の為の大宇宙、大空間・大時間を御用意下さる長光寺様への感謝を厚く致しています。

後期高齢者である老生、定年退職後、年来の望みが叶って、諸の善知識に親近し、佛の教えを学んで参りました。当山の、前の従容録と現の正法眼蔵の提唱。他処の、例えば大方廣佛華嚴經の説く壮大な佛の世界と菩薩の修行、悲華經や妙法蓮華經の慈悲、漢訳前の佛の言説ウダーナヴァルガ、八大人覺を含む佛垂般涅槃略説教誡經、唯識の頌、無門闕等。

世上、今、佛教に関する出版物は溢れ、様々な組織による様々な行事も枚挙に暇無いようです。

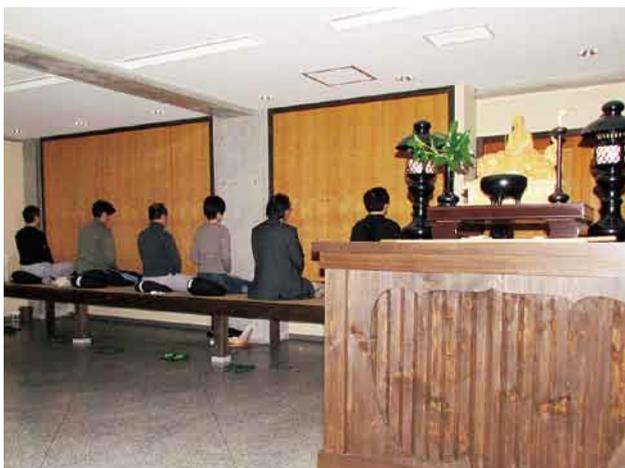
その様な今、私は、師・黄檗希運の伝心法要の一節を非忘の戒めと観念しています。

：今時人祇欲得多知多解。廣求文義、喚作修行。不知多解翻成壅塞。：

：今時の人は祇多知多解ならんことを欲得して、廣く文義を求むることを喚んで修行となし、多知多解の翻つて壅塞と成ることを知らず。：

この文句に突き当る度に、瞬時に長光寺道場が想起され、その存在の有り難さ、懐かしさと共に無量の大きさに思い至ります。そして師・道元の教える如く言を尋ね語を逐うことを休止し、師・智顛の説く身調和・息調和・心調和を図り……。と求めること切ながら、老骨図り難く残念なことです。

実際の辺、道場の壁板に対しながら、絶えず腰は



曲っていないか、耳と肩は正対しているか、呼吸は吐き切っているか等々、形―姿勢のチェック専心の裡に放禅鐘を聞くのが毎度の経緯で、坐禅法楽・身心脱落・正法現前など身近かのことも覚え、僅かに数日、放禅鐘一鳴を得た時、坐したことの楽しさと嬉しさを同時に感じたことがある程度の有様です。

ただ、師・懐契は随聞記一之五で「身の威儀を改むれば、心も随って転ずる也。…」と記し、同三之廿一の「得道のことば、心をもて得るか、以^シ身得るか。」の中で「然れば、道を得ることは、正しく身を以て得る也。…」と筆録して、姿勢の大切さを指摘する師・道元の言葉を伝えているようです。多少の慰めです。

このように思巡してきますと、文殊菩薩の支配する大宇宙が、今、新宿の一角に貴重に存在するといふ有り得ることの難しさ、有り難さに改めて目覚め

る思いを致します。その上で、佛縁を得て坐禅できる有り難さと坐禅する有り難さを、深く徹して感じています。

坐禅と私

富井敏弘

私が初めて坐禅をしたのは、一九六五年四月、会社の入社研修で、岡山の総社に在る、宝福寺で一泊体験をした時であった。それから五年程、月に一、二回通っていた。森に囲まれた静かな環境の中、とても落ち着いて坐れた記憶が有る。しかし、二十歳の血気盛んな頃であり、元々技術屋なので、どうしても頭脳先行で、その上、碧巖録の難解さについて行けず、少しずつ遠ざかって行ってしまった。その後四十年、会社生活に明け暮れ、ある時は真剣に、ある時は流され、二〇〇六年に定年を迎えた。

同じ町内に住んでいながら、長光寺を知ったのは、一九八五年五月、母が亡くなった時、来て下さった僧侶と、何故か、葬儀の後、一緒にお参りをしたのが始まりである。確か、三田の玉鳳寺の村山住職と言われたと思う。その頃のお寺は、今の様に立派で無く、木造の寺に、老婦人が一人居られた記憶が有る。それから二十年、定年

になった年、又坐禅をと思い、探したら、門前に坐禅道場と書かれていたので、歩いて来れるという手軽さも有り、直ぐにお願いした。坐禅堂の落ち着きと、住職の法話の面白さに、いつの間にか六年続いている。しかし、相変わらず技術屋の性^{サガ}というか、頭先行で、無心には程遠い日々が続いていた。

所が、あの3・11の大地震の後、一瞬に二万有余の方が亡くなり、その現場に立った時、唯、立ちすくむだけの自分がいて、残された人々の声を聞いている内、何かが私の中で変わったと感じた。

「こんな事になるなんて・・・こんな事になるんなら・・・」

「生きている内に・・・出来る間に・・・やってあげたいなら・・・声をかけてたら」

因果はめぐるという連続性と、刹那消滅の、「今」しか。その一瞬一瞬を生きる。

何かを感じた一瞬だったのかもしれない。やっと、よわい七十にして、坐っていて、少し楽になったような気がする。理屈を抜け出た、ひとりの人に戻ったのかもしれない。

これからも、出来るだけ、長光寺に参禅に通おうと思う。

◎お塔婆は施主家が立てて下さい。

五月二十三日のお施食会のお塔婆ですが、長光寺ではいままで寺が立てるといふ習慣になっておりますが、本来は御自身の手で、感謝の気持ちを以てお墓に立てるのが、一番大切なことです。ほとんどの寺では欠席の場合は、後日お施主さんのお寺に来て自身の手で立てております。出来得るならば法要に参加して法話に耳を傾け、その後墓参をする習わしが必要です。ぜひ本年はご自身の手でお立てになって下さい。

春夏秋冬

永平寺だより



祖山 不老閣 平成 24 年御征忌
(左から2番目) 松倉徳允 (中央) 福山禅師

長光寺の徒弟松倉徳允は福井県にある大本山永平寺へ上山してより早二年目となりました。本年六月まで宗祖の廟所の侍真寮という場所におりましたが、現在不老閣という場所で役をいたしております。この場所は永平寺貫首(禅師)の居住する寮舎で、禅師さまの身の回りのお世話をする行者という役をこの初夏から勤めています。永平寺の禅師は現在曹洞宗管長を兼ねていますので、毎日が多忙を極めています。

また、全国を廻る仕事も多く、とくに九月二十九日は宗祖の命日にあたり一週間の法要が営まれます。これを御征忌と言いますが、全国から寺院並びに檀信徒が法要に参列するために上山しますので対応に大わらわです。

いままでの役と今回の仕事内容が違いますので対応に大わらわです。入れたたり、料理をつくって出したり、墨を磨って揮毫の手伝いをしたり、禅師さまの支度を手伝ったり、まったく気を抜くことのできない役目です。普段経験のできないことの仕事ですので、この冬も今のままの役で越すかもしれません。更に精進して宗祖の精神を学んで欲しいと願っています。

長光寺の年間行事(平成25年)

- 一月朔日〜三日 新年祈禱と年頭行事
 - 二月一日〜七日 報恩撰心(二週間の坐禅会です)
 - 二月十五日 涅槃会(お釈迦さまの入滅の日)
 - 三月二十日 春の彼岸会
 - 四月八日 花祭り(お釈迦さまの誕生の日)
 - 五月二十三日 恒例の施食会(法話と法要)
(皆様の御先祖さまへ報恩供養する大法要です。御法話と御詠歌をおとなえいたします)
 - 七月十二日〜十六日 盂蘭盆会(お盆の行事です)
 - 九月二十二日 秋の彼岸会
 - 十二月一日〜八日 臘八撰心(二週間の坐禅会です)
 - 十二月八日 成道会(お釈迦さまの悟りの日)
- ◎その他の月例行事として、
- 第一、第三 土曜日 参禅会(個人)
 - 第二、第四 土曜日 団体並びに学校の参禅会
 - 第二、第四 月曜日 梅花流詠讃歌練習、写経会

編集後記



▽長光寺のいま。

寺の裏手に大きくなった楠の木があります。当初、小ぶりの木であったと聞いていますが、現在では大きくなって、幹回りも太くなり、たくましく成長しています。常緑樹の楠ですから秋の紅葉もありません。春先に落葉があつて掃除をしなければなりません。毛虫が発生するわけもなく、春先の剪定以外は比較的手がからない樹でもあります。

ただ、大きく伸びるに従い、カラスが巣を作つて皆様に迷惑をかけた。近隣の家からは枝落としをしよ。うとしたら「木陰で夏は助かるので木を落とさないで下さい」という要望が届いたりしました。

しかし、大きくなるに従い、落ち葉は気にしないのですが、近くに墓石を動かしたり、参道の敷石をもちあげたりする、困ったことも起きます。

いつかは決断しなければなりません。が、やむを得ず伐採することになります。都会の緑が段々少なくなり残念ですが、ご理解の程をお願い致します。